



茗會文話

二

485
489
2





茗會文談卷之二

目録

- ① ちくら
- ② 射術
- ③ ろはず貧樂
- ④ 古代の石
- ⑤ 造石の法
- ⑥ 油煙松煙
- ⑦ 五分くの辞

八 人性

九 大塔宮

十 板行書籍

十一 遺恨

十二 掘出し

十三 唐土人情

十四 弓らの上

十五 ひらご、いうご

十六 奉公を構ふ

十七 年を経て花の鏡との歌

十八 穀蠹

十九 一休和尚

二十 馬をせむる

廿一 木綿

廿二 荻生茂卿

廿三 和歌

廿四 やまとの訓

廿五 櫛

⑥ 矢人川村

⑦ 鯨

⑧ 人の道

⑨ 矢束

⑩ 獣肉

⑪ やまと歌

⑫ 地震

⑬ 日の字訓

⑭ 焼餅をうる老婆

⑮ 雪

⑯ いろは

⑰ 犢鼻褌 タブサギ

⑱ 墨ハ餓鬼まうらせ

⑲ 福善福淫

⑳ 生々の理

㉑ 孝道

㉒ 日本弓

㉓ 古今風俗

四四 蹈襲

四五 地名

茗會文談卷之二

錦城 大田元貞才佐 著

一 ちくら

日本と唐との間、海にちくらと名付る所あり
よしてこれより唐もあらず日本も何らぬ事
をちくらとはいふ也陸王の学は儒仏のちくら
と王李の名は古今文章のちくらと。馮道奇賢の
行は原文の厚恩のちくらあり

② 射術

弓を射るに中るを上手ともいはず、何とらぬと
ても下手ともいはず、されど何とらぬ上手はふき
にちん

③ へはす貧樂

いとつて貧しきをち、とどざよ不喰貧樂とい
ふとあり、實は然れば孔顔の境あり

④ 古代の石

天王寺亀泉のうしろは小き石橋あり、或人曰古
の石棺の蓋ふりは、四尺ばかり長さ一丈ばら
り、いとりてあつく四方は大方。つん原文のまま、但しこ
ゝのほり土中ようづもぬて少くむり見ゆつ
ふりたる石あり、といふ凡そ千年以上物也

⑤ 造石の法

或人の申すは造石の法は遠江産の石灰を糲ふ

てぬりうとむていふ

⑥ 油煙松煙

墨よつくる 煤セいふもねは 油煙松煙あり熊野
の奥より出す薩摩日向よりも船よつこ来るい
うふる下直の墨よても外のものあしはあし松
煙ありといふあしの次第さあふり室をも
うけ四方は障子をたて廻して下よて松乃心油
の多をとくこ油煙ハ外あしはちらず南都のこ

ふり膠ハ唐より来るをよくす

⑦ 五分くの辞

世人をふどむるをこざは五分くといふるか
ん心得ふバものこは深く入過ぎず人をもちか
めず世をもうとず程明道の語は人事皆非ふる
の理あしその玉へりとくへに十のもの十あが
ら何しまといふとはあし其内よひちつふとつ
ハときともあるその心こ

⑧人性

荀子の説は人の性ハ悪あり善とするハいつを
りまればたゞ聖人の教は従ふべしといふいづ
れの儒者も聖人の教を貴まざらんさあせまづ
のら身は教を受る善性あるをあらうずして一味
地は聖人くといふハ聖人は道を預け置たり去
の荀子孔孟の旨は異れれば後世より用ひる人
あし三十年前大坂は山の内何某といふ儒者あ

りて荀子を信せし近年又これを信する人あ
りおもへらく人ハさあ春然たる動物より聖人
の推らへくる道はちり付て禽獸をまぬらるも
ありさらし人の身は貴き物あるを知らず

⑨大塔宮

大塔宮をせちうよみはおほしうもあむいづ
此の時より誤りけむよし野よて京北兵ども
大般若の櫃の蓋をもちて大塔宮はあほしま

さび大唐三藏法師おほせりていひくハ大塔大
唐音のちよへるよよりていひし戯よりどいと
うのちよもよむべきあり

⑩板行書籍

正平三年に板行せし論語集解ありて先年予見
侍りし泉州堺の人印板せし正平の年号ハ
南朝に用ひらる天下通用の年号は阿らず然れ
ハ其時堺ハ吉野に隨ひし証もすぶくおほよ板

行の如し其後よ又千字文をも板にせりて

⑪遺恨

賢人君子に閑する遺恨の事ありその功德よ
りて勁敵ほろび国家無事ふるよと神明の守
らせ玉ふん又神仙の加護也へていふ勢ハ
矢石のひのちのちハ原文の天下治れ
ばよとてのち思ひいまほる心ハあるよと傍
より見れば口あき事

十二 掘出し

俗よよきものを得たるをほり出しといふほり
ハ掘するより掘出しといふるをいふるを

十三 唐土人情

もろろこの人に多く井の蛙の見たり吾國の外
まゝ人も人あらざとももふ故は外國の人を犬
羊の性といやしの牲羶の習俗をあり天竺ハ

西戎の内事れば又いやむあざりん然るは佛
といへる道有り犬羊の性の人此いひ出へまよ
あらずるぬよてその偏見をいふむづも天地
の間教ぬぬ國よればいりあるよき國何らん
も知るべりりずあまつさへ僧もある人ハその
いやむ西戎犬羊の性の人おいつる佛法は日
びる中華中國ものける先王周孔の道よまき
ぬりと思へりいりあるぬえといふるをくら
ず

十四 己らの上

今の俗は産所を己らの上といふをろくも然
り世俗は在葦不記子といふ己らの上にて子を
殺すことあり晉賈后の傳は葦物産具を内るも
も見えり

十五 ひらどい

いよ〜へ水上を通ふものをだといふよやひ

らだハひらま舟といふどハ舟と云ふもの
しよるをん

十六 奉公を構ふ

侯國より臣下を退け出して他國に仕ふるを
をゆるさぬを奉公を構ふといふありるは年
月を経て又よびうへす為めより他國の臣を
よをおくむ故ありされば奉公をかまはれぬハ
仕官の上にて耻せず然るは今の世の奉公をか

まふといふハ多クハ其人ハ雅義をさせんとの
意地ニ然らばかまはれおしてい^まま給はるハ
よき仕合あらん一概ニ為すべからず

①七 年を経て花の鏡七の歌

凡そ池ハちを經るは徒ひてうね草すさび生
ひてもの、影をうつさず此池ばかりハ幾年經
ても清澄なれハ春とて花の鏡もよりつみよ
くもる事おん只花のちりする時のくもる

といはんちんすべて池を鏡よりあてての趣
向ありて三輪子の物語ハ聞傳ふ

①六 穀害蟲 こんぞ

米の中よ己く細ある虫をこんぞうといふ穀害蟲
あるづしよりて世の無能^りを食ふをぶんど
うといふ

①九 一休和尚

辯をもて人を屈するに只一時の機を以て強て説
をつくるあり及ばぬと一休和尚のもて檀
那一人来りて仏は供しくる菓子、自らをつらぬ
人のおがむ方へばうり菓子をつけたり和尚は
とふ此菓子、如来は備あり又人に見ず
為あり、和尚は仏は備あり然らばい
は仏の方より菓子あまむといふ和尚言下は答へ
てるあとの羽をりの紋、自身の紋、人の紋、
三づらの紋あり自分の紋あらば己が見る所

修辭通

南豐日出帆足萬里 著

夫言人之所以宣意言相錯成用之謂辭文者
言辭之載于簡牘者也凡人之技能後世益巧
故其言亦古簡而今繁簡則所含蓄者多而意
在言外繁則所指道者悉而意盡言中古今
雅俗之所由生也原古以治今則易由今以治
古則難簡難明而繁易通也言以載意未通
其言而能通其意者否也其身不能言而晰言

之情者亦否也豪傑之士論學能剖析至道往往失之目前者不能文之過也故學問之道先治其辭今我生斯邦欲治異域難明之辭不亦迂而難爲乎是誠然然吾邦之爲國取教於唐明倫治國軍旅醫藥百工技藝少不資始於彼邦者彼邦古典乃教道所在苟不通其辭豈得繹其意而無謬乎是作文之所以貴於古也語曰言之不^文敬行之不遠不可以臨衆是作文之所以貴於修也此二者學文者可不識也

初學受句讀既通略能解其義輒當學屬文欲學屬文宜先讀西刻無和詰書言語位直各國殊別和詰傍註雖古人發蒙之巧也讀者多注神和詰倒飛之際語脈位直一無所解臨文茫然不能措手西刻書顛倒詮釋必須自爲始通積習之久皆瞭然目下然後舉用之雖委曲難措語者必皆隨手而集故作文之與讀西刻書互相助發以俟文章成熟數年之後廣取書史讀之必有破竹之勢諸子百家之說可不

待師而明

初學屬文從其材高卑須為復文數十首所謂復文抄取經史中一節數十字至百餘字其宜和詰讀者代以國字漢音讀者仍用漢字一直寫下從本邦語脈國字數字關紐成一漢字者從書成隊仍每字間施小垂針一字成一漢字者單寫異隊而字代用國字天字則字用列波難讀者字傍別註二字焉矣二字難國字以助之使無譯則其處施小圈從上下文勢以安字若塞哉難讀者字傍別註小國字

以助之使無與正文相潛潛漢字二字以上相連成正文者亦字間施垂針務在易辨識每一章後注共苦于字以便復成漢文時推考既成以授初學其國字盡代填漢字且使各復本位以成漢字與原文比較正誤謬以習用字除和詰倒飛之習此際徂徠譯文筌蹄亦可助啓發但才氣高者不必事此直學屬文亦可也伊藤氏復文漢音皆代用國文本邦所傳漢音潛訛難辨則老師宿儒尚難之豈可以強初

學乎

復文起稿宜用古文多虛字斡旋便於講明語
脈如後世稗史多實字連用則非所宜也故吾
儕起稿多用文明孟子其爽且後生平常所誦習易于
啓發也。

學文宜先學叙事不學叙事其文必不能精熟學叙事

法勿論野史小說日常事務水荈叢話皆
譯以漢語務使與事相當不得鹵莽文法亦多
端有直筆有婉辭有遠而映之者有逼而取

之者苦不善議論不識裁制其叙事必有冗長
不振之弊必須兩者相發以致筆下變化然議
論之事非稍涉獵文史胸中具小見識者不能
作也

本邦學叙事先務記作用語為要所謂作用語
如進退與奪類斡旋實字而成用者是也其
實字自就前修所輯諸書檢求也伊藤東涯
名物六帖僧焦中學語編類是也言辭古簡而
今繁萬國皆無不然而列國多以音定字漢人

獨以言定字則勢不可得敏而終不能不敏系故
後世有所謂疊字者如恐懼^懼直^直安^安愁^愁波^波濤^濤山^山岳^岳
類其實字義各有所當而在行文中與用一字
全無區別疊字尚書少見蓋起周時歌詩用之
永言之道欲其調暢也戰國以來散文用之故
當作文時宜下疊字而單下一字則必覺其少
勻稱此亦不可不識也

文辭置句位置前後各國異構在和文雅正者
猶或與唐異况野史小說尠雜不倫苦欲直取

譯之必有窒礙不通之病法當取所譯書一誦
書記其意前者後之後者前之各以類相從成
章之際務使暢達乃可世說載潘岳爲樂廣
作表取其語錯綜之乃成名文彼國談說入文
尚須錯綜况吾邦乎文章瑕疵不必須人指摘
多作乃自知歐陽永叔此言蓋欲人務多作也
文辭之學雖有奇才不多作必不能巧西人猶
然况東方乎時有善師亦須從咨問以資啓發
亦不爲無裨然務能多作不必由師授苟傲惰

憚煩不能多作雖曰提目詔之亦不能成也
地名入姓名及度量權衡皆直書不得修改
以求馴雅合唐古制官號勿論三朝效唐制置
幕府及諸藩近世所置字義略通者亦不可改
定也

漢之二典尤古其辭亦極簡質二典以降辭隨
代變至周周公所作詩書皆究其巧以及洙泗
之時文辭大備論語中庸孟子左傳諸篇可見
也洙泗之道衰諸子百家興各著書以言其

復文起稿法

孟子ノイワク富歲子弟頼ヲウク凶歲子弟
暴ヲワシ天ノ才ヲクダスシカクコトナル
アラズナリソノモツテソノユコロヲ陷溺
スルトコロノモシカルナリイマソレ麤
麥種播シコレヲ糞スソノ地ヲナシクウユ
ルノトキマタヲナジ淳然シテ生ス日至ノ
トキニイタツテミナ熟ス○ヲナジカラサ
ルアリトイエドモスナワチ地肥磽アリ雨

露ノ養人事ノヒトシカラザルナリユエニ
ヲヨソ類ヲヲナジウスルモノミナアイニ
ルナリナンソヒトリヒトニイタツテシカ
ウシテコレヲウタガワン聖人ワレト類ヲ
ヲナジウスルモノ
右百六字

記事作例

作例宜載前修文而前修集中少有
記事短篇偶有之原文尤不易檢索

故姑以余所嘗作者補闕覽者幸莫
莫怪也前三首出武將感狀記後一
篇里巷鳴見者所說人人能知且莫
有筆載所以不載原文也

齋藤龍興ノ臣竹中半兵衛ハ一萬石ヲ領
シテ西美濃菩提城ヲ守ル沈勇温毅ニシ
テ人其才器アル事ヲ知ラス三老臣安藤
氏江不破等之ヲ侮ル竹中憤ヲ含ミテ三
老臣ヲ殺サンコト計ル其比竹中カ弟半

平龍興ニ愛幸セラル竹中ヲカワクハ城
中ニ半平カ家宅ヲ造リテ食浴ノ間ニ猶
ヲ怠ラス近待ノ奉公ヲ勤サセハヤト申
請ケレハ龍興即其望ヲ許サル是ニ於テ
竹中勇士二百許ヲ傭役ノ體ニナシ三老
ノ一坐ニ會スルヲ待テ其坐ニツト人先
一人ヲ手ノ下ニ斬リ二人驚ク所ヲ又二
人ヲモ斬リ斃ス傭役ソト思ヒタル者モ
イツニカ陰シ置ケン面々鎗刀ヲ取テ城

ヲ守リ門ヲ固ム竹中龍興ノ前ニ參リテ
臣更ニ謀叛ヲ企候ニアラス只三老臣カ
驕奢ヲ惡テ君公ニ代リテ誅ヲ行タルニ
候恐レナカララ比城ヲ御出候エ事靜リ
テ後迎タテマツル可候ソト申ケル龍興
カニ及ハス城ヲ出サレテ竹中ツイニ城
ニ據ケレハ齋藤家ノ士卒多クハ竹中ニ
歸ス竹中後ニ龍興ヲ迎ユ己レ相將ノ任
ニ處テ權勢日ニ盛ナリ信長竹中カ龍

興ヲ逐フト聞テ速ニ龍興ヲ殺セ美濃全
州ハ貴殿ニ興ユルソト以使云遣シケレ
ハ竹中不悅我モトヨリ龍興ニ叛ニ非ス
一旦家臣ノ罪ヲ匡シタルノミナリトテ
サシテ返答モセサリケリ竹中カ存生ノ
間信長敢テ美濃ヲ侵サス竹中三十六歳
ニテ病死手ツカラ首ヲ斬テ虜ヲ捕ルノ
戦功一度モナシ然レモ文教武策盡ク竹
中ニ決シテ人々其智ニ服セリ間暇アル

時ハ常ニ好テ讀書其器量甚世人ニ超々
リ

齋藤龍興臣竹中半兵衛食祿萬石守西美
濃菩提城沈勇有謀人無知其材者龍興三老
臣安藤氏江不破皆侮之半兵衛怒陰謀殺三
老臣半兵衛弟半平幸於龍興半兵衛請為
作宅城中使得朝夕事君龍興許之乃使壯士
二百人陽為役者執作待三老臣會議直入斬
一人餘二人皆驚遂盡殺之役者皆被所藏

甲執兵守門半兵衛人見龍興曰臣非敢反也
惡三老臣驕恣為君誅之也請君暫出城事定
而後迎之龍興不得已而出半兵衛遂拔國人
多歸之者已而迎龍興相之國事皆決半兵衛
織田信長聞其逐龍興使人謂之曰速殺龍興
美濃子之有也半兵衛不悅曰我誅為人臣而
驕恣者非叛也不答半兵衛未嘗有斬首野戰
之功暇則好讀書才氣絕人遠甚沒其身信長
不敢侵美濃年三十六病死

子のこあるべしうしろもあるはいうべあり
ちいふ檀那言あしちん是一時の機より人
を屈するありもろろしてむかし堅白同異の
辨、晉朝にて清言の類を禪家よりつとめよふ
りもし是を論せば一休の説はあやまりあり人
の衣類の紋、身のしるしありおのえあるしあ
るは人は對くする事、仏前の菓子作人の見る
為りてあまも同様あらざ
又檀那の一体をあむりするはおもしうらなず

一休の心ハ菓子を備へぬともよしとあもふ心
あれば藁も菓子もあまじとよ見あする

⑥馬をせむる

今馬をのり入るゝをせむるといふ大戴礼は四
日執涉攻駒其下而攻駒者教之服車城らく原文
のまゝ
を置く本書 ちあり人の乗るて車をかゝるも
を参看す
の違ひありせむるといふとありせむるハ即
ちあさむるろろ

⑦木綿のふ

僧契沖いふふハはひまゆ三字といふ木とや
安藝の國より多く出るよりと見えり和名抄
子杜仲、陶隱居本草の注云杜仲一名木綿杜
和名波比末由美

按するよふの本草の注ハ木綿といふるこゝ
ろハあふえ綿といふは蚕のこゝより出たり
生すよの杜仲の中よある綿ハ木よあるゆゑ

木綿といふはあり今の綿花をいふは阿拉伯
折々多_二白絲_一者也又祭祀具云本草注は木綿和名
由布折々多_二白絲_一者也

木綿は木と草との兩種異國ありても有て之を
陸龜宗が木綿花の時^{サカ}猩々啼せ作るはいつ
れをいへるはあり

杜仲はあり醫者のいふ今俗はいふ_二別_一なきあり
折はしろき糸ありてあり然るは契沖木と草
との兩種有ていつば今の棉花の事ありちか

へりとも杜仲は灌木の類ありて草ありはふ
し今の棉花は木と草との二種あり天工開物
は云棉花古書は名は臬麻種とあり木綿草綿兩
種花有白紫二色是は今の俗の木綿より古の臬
麻といふはいつは覺束あり此木綿西國の種
ありて中古唐へもいつりしは高麗へは元の時高
麗の使者取りて歸りしといふ本朝へは嵯峨帝
の頃崑崙人綿種を持渡りし上よりの命ありて慶
々ようあせらるれども行はれをこしてやみけ

リ其後植始めたる、織田氏の時ありといふ古
にありて布まする法又、其器具ある故次第は
廣くまかりける島夷卉服の注は吉貝を引る、
今の木綿布ありといへり

吉貝は掇耕録よりほく見也唐書外國傳は
吉を古よ作る

いよくへわが國よあまき

あまほち

又延喜式は木綿多く出たり鴨頭木綿二十枚ふ
どいへりこれ、青花紙のとより又安藝木綿と

もいへり又木綿百 ともあり是あり、紙を見
えりる王勿論すれば神代巻といへり、
綿と見る、大子あやまりあらん、然れば、
麻の別種又かるその類あるべし

② 荻生茂卿

並河翁いふ荻生茂卿、温厚よく博識の人ふ
り一つおろき事あり、我ばかり知りて人
はあらぬもおろし我黨とのみ出あひて廣く

世人は交らぬ人この弊あり

③ 和歌

萬葉集を見れば天地の間は歌よまれぬ事ありし
詩經をよむも亦然り詩も歌も口口文辞綺麗を
主とし風情雅馴をこのむよりまぬはともむとつ
くると是はよまぬとつらぬをちてつらぬ
といはぬと出来しつみまに詩歌ともは詞をか
ざりていつたりをいふとよまり来り人の心

を種うての語は所謂子性情をいふの詞は詩
歌の本とする所すればご乎詞をえらむより本
をうてあり

文章の道も修辭といふはよりて事專一錦の
きらをほつめて是をぬひつるか如しとらへ
のひちつみあはよけれども大人の衣服に用
ふべからず况や易といつる修辭は文章家とい
ふ所七八九の心はかりなり

④ やまの訓

やまの訓山外ある、我家傳來の説より他家の説よりをぬ事あり先考あつて貝原篤信七下河辺長流よりくわしき篤信、釋名をつくりて已に説ちし長流、僧契沖まかり契沖代近記をつくりて已に説ちせり

⑤ 榊

かゝる榊ふり延喜式は青榊乾榊と見えたり祭

祀の器皿の用ふり葉を用ゆるよりてかゝるはの字をそへてかゝるといふよりかゝるは榊の字を用ゆるは俗のゆゑあり榊は檜の類の類より則ち榊葉をこしてかゝるはといふは近來物産家の説よてかゝるなり

毛詩邶風及ひ鄘風の榊舟の詩は汎くる彼の榊舟あぢ、あるはみふひのきの類よて造りたる舟の義よてかゝるはあらざる

祀の器皿の用たり

⑥ 矢人川村

京都は矢人川村何某といふものあり時の上手
あり然るよその家は至ればせつる九尺の店よ
て矢づら一筋もふく烟もとてとねたるさよこ
其他の矢人の大舗をうまへ矢の、多くつらぬ
き人居あらびて矢をとめ羽をつくるん然るよ
下手あるも久田舎へ下す鹿麩矢のうをつくるん

すべて矢も限らず巧匠は皆貧乏明の時の儒者
あほ多かる内は王遵岩帰震川なども門をと
ちて蕭索たり用る所は尊ぶ所は何ら尊ぶ所
は用カる所はあらずともえり

①鯨

我國よての大魚はくくらしもろくもくもく是
をいふとあんに至りて大あるは三十むろあり是

は常はあらず平常は十四ひろ至りて小あるも
九ひろ十ひろはありといふそのうちさ丈あるひ
ちも無鱗ありもし鱗あらばもり入るまむけれ
ば取らふるもと雑りるべし無鱗は世人の幸ふ
り一匹の脂肉鬚^{ひげ}筋のほとひ銀五十貫ほどふ
り脂の半分の直あり腸も煎て脂をとる骨も
処よりてけづりてかぶらほねといふ筋は綿
弓の絃もふる只頭のこすとりものこひれも
いふは鬚のこちあり鬚はすあはち歯あり別

のろき牙歯にあそ

九州の内あてあうして一年は三百頭ちりあり
其ちりやうに大指のふちさある縋りて大ある
網をつらり海中の潮のゆきき所は張置あま
の船あてぬあをををき追少て網の内へ入
鯨ついに網をつき破れに身あまひては
らき自由あうず其時より入てつきちある
ありむうしに網を用あず故あ多らにきりあ
しりり網をもて引取るるあうず身を働かせ

とちまり

⑥ 人の道

人の道を修行するに轆轤のつるべをもて水を
つりあぐるかむちし今つるべをさぐるに汲ん
ちよにあらず水を何ぐるん何けんちするに則
ち汲んちするにぬるつるてひちつひちつる
ぬるつる

廿 矢東

人の問ける、矢を何えんといふえんの字いうに
東の字きてあそゆりや
答ふ礼記は宗廟角握てあり握ては側手をいふ
側手、四の指をえばどつるあり四指をえばど
つるほもの長さの角の生ちる時は祭祀は用也
ふありゆろろこして後世は歳把といひ日本

きていんえんといふ皆この四指をえばどつる
ほもの長さあり東の字あらず側手の字あら
ん

三十一 獣肉

續日本後紀は仁明天皇の御時大伴友足といふ
人有り獵をこのみつねは獸をかりあるまき鹿を
とれば其肉のよき所に天子は敵を何ありに公

卿へるゆくとねくり遣しおのれも打食て一き
れもあまさずちあり延喜式内膳式は正月元日
より三日迄の天子の供御の猪肉鹿肉ハ近江の
國より貢す其の外神代より獸肉を上下ちもよ
用ぬ来り玉へるよいらあゆバ後世よいらて
織していませ玉ふるや江談抄もそのをとい
ひて何れの時よりいませ玉ふるやちあり
延喜式民部式は諸國より牛乳を貢す今いふほ
うせるのちあり

典藥式も出たり是を蘇とるされり蘇ハ
酥ちあふと牛羊の乳汁をいり

③ やま七歌

僧青山いふ日本の歌を和歌といふにたしうよ
らぬ事あり万葉集は和歌といふハ人の歌を和
こころありやま七歌といふハあらば大和歌と
か倭歌と書くべしといひま

原文此
間別
提子
り
居

詞林藻・志きくまの道といひて歌の事す
るこれ^り和歌の類ありてかみりず志起るや
まも、ついきとり志きくまのといひて日本
の事する例あり

③地震

日本紀に地震をいふるを訓たり地の字の
訓ふいふよりつちといふ土の事あり天に關

せず天に對する地といふべきか後世の
俗にふいばりいひて地震の事するは阿
也より

③日の字訓

日の字をかて訓むるを小碓尊のわあて日
よハ^リちをかといふを始ちす然るは外より日を
かてよむとちらあり

余按ずるは日をひとよむハ日月の時あり日を
かぞふる時はハかともむといふはかよみの心
日をとみうぞふる心
かすが山は元ハ剋菅山より春日の雅名は改め
らる春はのすむゆゑ春をかしちよみ列ハ
日の字を用るるろろあるべし

廿四 焼餅をうる老婆

江戸は焼餅をうる老婆ありある人いふ老婆
年いふつあるぞ八十より七答ふ其年迄焼餅を
すればさむく上手ふらんやけにやく程くらが
りへいるやうふらね是もむひもつも焼おほせ
はあそむつふ世の人おのれがまける道うても
藝あても高上の理をつけて人ほふるを中正
の道より見ればいつれもあゝの老婆のやき餅の
ごちし

⑤雪

天下の雪ハ近江を越^ホのぞの蜀の山尤も深しひ
ゆるハ信濃の飯山甚し余少年の時飯山より三
年ばかり住侍りしめてとく知り冬の朝をま
出てはじめて烟草をすふは吸口の金唇をひし
ておほり付ありやがてハはふる水も甚しきひ
へやうあり四方雪はうづもる風ハいらす肌
のさむさいさのえ其うらさ

⑥いろは

今のいろはといふものハ護命弘法のぬり此
作ぬる長歌のときあり是めて日本の語みよく
つとすといふハ覚束あしいらんちせんバ先今
時いふ假名つりひていふを暫くおきて人の口
より出口^ホ声音よてこの長歌をよむはホへヒ
ムフケコのセツの声あし川ふらうありキ四ツ

ありエイ各々三ツあり又ケフのぬらうを何れ
せとる声有り是より語言ふありといふべし
んや

是よりあつらひをいふをほめてあくの
ヲんちのヲあぢいふをいひ出せりあまね
ん人よあみまみていふくくる人の口より出
る声も文字も書るもいひ違へり口もいろいろ
ちいひて文字もはいろはとわくといひえいろ
わもうけるわのよのわも同じ声出るも唇舌牙

齒喉の差有りといはじ四十七字、字も然りこ
の數字もかぎるべからず

廿七 犢鼻禪 タブサギ

釋名禪貫ふり貫二脚上繫禪要也司馬相如傳は
犢鼻禪の事出たり註は三尺布作形如犢鼻
也ありこれ兩足をつらぬく穴ニツあり牛
の鼻さきの如し是より名つけたるか然れ

は脛より股の半まである物を見えたり今もい
いづばも、引のきやなんあまきそなり、
日本もむろし、是を着るるあらんこの一幅の
布帛まで豎横よからみ付たる、戦陣の時鎧下
の便利のとめよあしうへくるそなりえ近き事
そなり

そふさぎの訓を川井立敬といへる人ありふさ
ぎの上を略せるかといひし、さも有べし後世よ
とふさぎの訓をとり失ひてふちもといふ余推

しておもふよ是ふさほ子ふせこの略語ありつゝ兩
足ふそそとしてつくる物也なりゆ、引ふを
ふふみちをしふりふそをふんてひふんを
ふそといふは和語よ其例おほし

廿八 墨ハ餓死みすみすらせ

俗間よ墨ハ餓死みすみすらせ筆ハ夜叉みすよそらせよ
そいふとあり陳継儒ハ岩栖幽事磨墨如病夫

把筆如壯士といふり墨ハ多きよかくあるづし
筆を甚れたるれんてふに、いづくに不審

③ 福善禍淫

書經ハ福善禍淫セあり又為善降之百祥為不善
降之百殃繫辭ハ積善の家ハ餘誤慶あり積不善の家ハ餘誤見之なり
是天の御心よて人君是を奉じて其罪を明ら

めせらるるあらしめ罰を行ひ玉ふ所謂天工人是
代之より乱世よ至りてハ天音を奉ずる人ハ亦
き由ふ凶凶の者幸ハ刑罰をよめある、もあり
善人も不幸ありて禍患をうらみあるもあり然れ
ても天の賞罰ハつねに身よあはれもあつて

④ 生々の理

多く雛を伏せる雌雞の腹ハはこ毛毳あり只左右の

毛おほひ重なりて毛あまかびて人見ゆ卵を
とくおるは肌は直は^{ツキ}何^{ツキ}か為あり
或人のいふ雛の長して始めて卵を生きて何と
、おるを見るはうつら腹の毛をくはへぬま
けり又ひよこ口口雌雄交はりて卵をあそ
おるどよ妙あるは^{ツキ}何^{ツキ}かあるはよ
ろそよ天地自然の^{ツキ}何^{ツキ}かありうとときと^{ツキ}此^{ツキ}智
ハ是天の与ふる所生々の道あり今ゆし女鳥を
こうち置て生育あらしめは人皆之を不仁と

いはん

④ 孝道

孝謙天皇のミエのりよ國をおさめ民をやまん
ぢるハゆらす孝をもつてねまむ百行の本孝を
先ちす天下の家でちよ孝經一冊をもとめ講
習せしめよ孝行の名何るものハ所の司より申
上よその玉へり此時佛法盛よ行はる、時ふ

此を眼前の政にかんのでつく人倫の道よら
せ玉つり孝の道大ありといふも

④ 日本弓

本朝の弓最も大あり故に夷の字、大弓の二字を
一ツは作れりといふ説文夷の字の注は从大从
弓東方之人よりといひ又大弓の字もあり夷
の字も同じ

是等の事はよりていつるうおもそ 技藝器物多
く唐土より傳へ来ぬるは弓のこゝに日本の制ふ
り三國史倭國のそころは木弓短下長上といひ
り是日本の弓の制往古もろそしあで聞えり
弓のたけ長きあり 弛を中央よかきてハ射る
はたよりよからず中央よあるべき 弛の下ある
るハ誠は日本よ限りあるとあるは是より射
法もや・とかひあり高題か作ぬる射学正宗七
いふ書ありの日本よ渡りくる弓書の内は此書ほそ

くはくまものはあし竹林流の射術に多く是より出たりと受け玉はる其内は射のみとあやうを種々よいつり我國の法に一ヶ条の妙所あり弓は目當といふとあし目のところ所は矢はらす至るといへり然るは是に上手の上といふべし下手は目當の法をいふも可ありといふべし

雲外聞声秋射鴻といふ射の極意をいひりて

④ 古今風俗

世の中は有様を見るは古今の別彼此の分さらあし古ても風俗のあきまるといふは後世とも同じおあむければとて鳥獸の如くもあらず鳥獸の如くもあらず兼尋の善性むりしよのちらぬ故あり兼尋の性は天のあふる故あり然るは性の外はあらはしありはやり

とありて夫子を以て、秉彜の性をもあらざる
に至る今の世のしあらざるむくしの世たるも然
り
論語に群居終日言義子なはず好で小慧を行ふ
難矣哉とあり人の言行ゆるしもあるまはあ
らざるしてせまらしく知とほしうらざる高ぶりをや
いほん放蕩とやソほん 傲慢とやつらん 古の風
俗ひもくま代り面白まともひつとより甚た
人を損ふこ

明儒の晉も宋もをくらべて宋の温厚謹あるをま
らひよらみ 晉の風流放蕩をひみまするの風
近年吾國人もあらひ来り大に歎くべき事な
こそ

④ 踏襲

明の詩家の踏襲をそくる何れはあま人のこと
へよ今年の鶯花は去年の鶯花にふるこして捨

べきか是るて踊襲の非あらざるを知らずして
あり

吾おもふよこの説尤あり然るも今の世はや
る踊襲ハ昔の鶯花を日乾まして春こてよあか
め悦ふあり去年の鶯花ハちりさうして今年ハ又
珍らしく花さき鶯来るより襲踊まくめば七
て鶯花を用みざるもあらず精神あきひほこの
鶯花ヲはあらむ

「此ちろろ原文錯誤ありん」

⑤ 地名

近年の詩を作者人己が國の地名をやめてもろ
ろの地名をすその詩をよめに唐の地名ある
由を唐めきてよき詩のやうと思はる詩中よ入
る、地名至りて不雅あるにたる所ありて一字
をとりらふる類ハくるしうるまきか宮根を
函嶺あせいふ類あり又呉あふ人に唐の地名ふ

れば皆雅馴みて日本の地名はおくあつて不雅
ちおもふ人あり尼山姑蘇といは雅なり尼崎
姑蘇といふは不雅と思つり畢竟見識あま故
あり

此頃人の詩を見しは兵庫の海を湘水といひ淀
川を楚水大坂を西蜀といひ河のとらふとを
らずかくいふに摂津を國と齊魯、筑波山金剛
山を天台山泰山といひてもよろしくよごまり
顛倒錯置を甚しからいふはゆるかに道学先

生の理屈ありちいせん

又かゝる流をきらふ人有り事々是は反す寫
楓ハ日本よふまゝのあれに詩料は入るべから
ずといひ詩をとくは俗語を用也是もまた甚し
日本のかへでの木ハ大概楓に似たり土地の異
よて少々のみあり有て見えたり東國の蕪菁は
長くて大根のむちも然れども蕪菁はあらうと
いふべからず京師鷹峯の大根ハよろくて蕪菁
のむちも

